

琴弾坂[琴引き坂] (三田市尼寺)

有馬富士ふもとの霧〈きり〉は海に似て〈にて〉波かと聞けば小野〈おの〉の松風

この和歌は、六十五代花山〈かざん〉天皇の御製〈ぎよせい〉といわれ、詠歌〈えいか〉にも加えられています。この花山天皇は、二十九才で皇位〈こうい〉を去られ〈さられ〉、西国〈さいごく〉三十三か所の霊場〈れいじょう〉の再興〈さいこう〉を果され〈はたされ〉、最後に、標高〈ひょうこう〉四百十八メートルの花山院〈かさいん〉に、ご隠せい〈いんせい〉になりました。



花山法皇がこの山に入られたのを、風のたよりに聞いた京の女官〈によかん〉たち十一人は、そのあとを慕うて〈しとうて〉、はるばる草深いこの山奥まで訪ね来て、法皇のお世話を申し出ました。しかし、女人禁制〈によにんきんせい〉のため、山上へは登るべくもなく、女官たちは、出家〈しゅつけ〉して尼〈あま〉となり、それぞれ山の麓〈ふもと〉にいおりをたてて永住〈えいじゅう〉を決意しました。

そして、月の満ちた夜や、花の美しい朝〈あした〉、これらの尼僧は、山上の法皇をお慰〈なぐさめ〉するため、この坂まで琴〈こと〉をもち出し、弾じた〈だんじた〉といわれています。



下山〈げざん〉のかなわぬ法皇は、時として、眼〈まなこ〉をとじ、静かに耳をかたむけられ、

「妙なる〈たえなる〉音〈ね〉じや。それにしても女官たちがいとおいしい〈かわいそうな〉のお一。」

とおおせられ、さらに「使〈つかい〉をつかわし、よろしく伝えるがよい。」と、つきそいの者にのたまいました。そのおことばを知った尼僧たちは、あたりもはばかりず、声をあげて、よよと泣きくずれたといわれます。

今もこの坂(琴弾坂)のあたりに、数株の老松〈おいまつ〉があり、吹く松風は、そのむかしの琴の音に通うか〈かようか〉のように、哀切〈あいせつ〉かぎりないものがあります。

また、山麓〈さんろく〉の小高い〈こだかい〉丘には、女御〈にようご〉(花山法皇のおきさき)とあわせ、十二妃〈き)のこけむした墓があり椿〈つばき〉の木々がその丘をとりまいています。



尼寺〈にんじ〉という地名も、ここからきたものです。